

多自然川づくり取り組み事例

タイトル	利根川水系中川における鳥類集団営巣地の今後について		
水系／河川名	利根川水系／中川	河川分類	都市河川
河川の流域面積	987km ²	整備計画流量	380m ³ /s(W=1/10)
事業	河川改修	セグメント	2-2
目標設定	定性的	事業開始年度	平成一年度
課題・目的(主な)	流下能力の確保、貴重種、特定動植物の保全、自然河岸、河畔林の保全・再生・創出		
工法(主な)	掘削(高水敷)、掘削(低水路)、護岸整備、樹木伐採、除根、移植、植樹、その他		
配慮事項(主な)	河川景観への配慮、歴史・文化への配慮、その他		

背景・課題、目標設定

＜背景＞ 江戸時代より現在まで埼玉県ではサギと人が共存してきているが、社会の発展・成長に伴う人の生活環境・行動範囲の拡大により、古くは200年近く続いた営巣地の消滅、住处としての大きな営巣地を追われる状況が続いている。その様な中、平成10年、利根川水系中川の河川区域内に確認された鳥類集団営巣地は、約20年を経て、埼玉県内最大級の規模の鳥類集団営巣地となった。

治水事業(引堤)が進み、今後、河道掘削が必要とされる中、鳥類という河川区域の枠組で捉えられない自然へ配慮を行う必要が生じている。

- ＜目標＞
- ① 河川区域内における営巣地範囲へのインパクトの低減(案)の提案
 - ② 低減だけでなく代替としての取り組み(案)、河川区域外を視野に入れた提案
 - ③ エコロジカルネットワークとして各種関係機関の意識向上策、取り組み方法の検討
 - ④ 単独の河川区域にとられない多自然型川づくりの考え方(案)の提案

取り組み内容・対策例

◆生態学の第一人者である三島次郎氏(桜美林大学名誉教授)を座長とし、サギの生態に精通した藤岡氏(筑波大教授)、埼玉県生態系保護協会と供に有識者会議を設置し対応方針について検討を進めている。

＜有識者会議＞

座長 三島次郎氏
筑波大学 藤岡氏
埼玉大学 浅枝氏
元日本大学 葉山氏
埼玉県生態系保護協会 堂本氏
埼玉県 環境整備センター 嶋田氏
国土交通省江戸川河川事務所長

◆生態学、サギ専門家、埼玉県環境、河川工学
～それぞれの分野の専門家による方針の検討～

◆調査や検討結果に対する評価・助言
～調査方法や区域、検討内容に関し評価や助言

◆モニタリングや関係する計画、文献調査の実施
～サギの生態系を中心とした環境実態の把握 等

＜有識者会議と検討で得られた知見＞

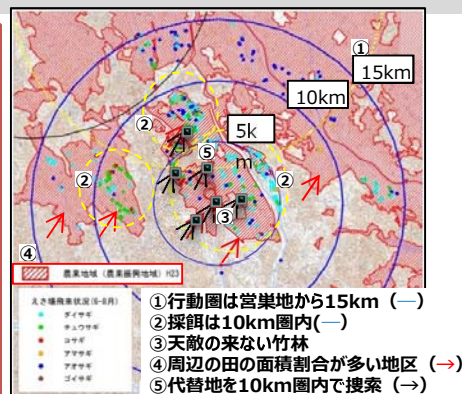
- ・河道内を触れないで残すことが理想的(回避)
- ・治水事業の重要度からも掘削は免れない為、全掘削ではない(案)を検討すること。(低減)
- ・河道内だけではなく、サギの生活圏としての策の検討を進めること(代償)

中川中島地区の
鳥類集団営巣地の様子



モニタリング結果、アピールポイント、今後の対応方針

- ◆H28時点で3000羽弱(増)、行動圏は15km、採餌は周辺10km、鷺は6種
- ◆埼玉県における大規模鷺類営巣地は確実に減少、中島地区は拡大。
- ◆中川の中島地区は「埼玉県」として重要な地区となっている。
- ◆改修による影響は逃れられず、河川管理者の対応は注視される。
- ◆鳥類として自然の鷺は「中川多自然川づくり」の枠組では対応が難しい。
- ◆国、県、市、整備部局、環境部局、環境団体など関係者で情報を共有し、今後の対応方針を検討し始める必要がある。
- ◆普通に存在している状態のうちに、エコロジカルネットワーク、生態系環境確保に取り組むことが重要。
- ◆水系間での保全も視野に入れるような検討が望まれる。



備考

利根川水系中川における 鳥類集団営巣地の今後について

Keywords : 河川改修, 自然環境の保全, 営巣地・コロニー

Before



After



平成10年、河川区域内に確認された鳥類営巣地は、約20年を経て、埼玉県内最大級の鳥類の営巣地となった。治水事業（引堤）が進み今後河道掘削が必要とされる中、鳥類という河川区域の枠組で捉えられない自然へ配慮を行う必要が生じている。河川区域でのインパクト低減と、営巣地（河川区域）から考える生態系、自然環境の回復に向けた取り組み内容について報告する。